

ブルーノ・タウトの提言 1933

昭和8年11月14日（提案の日付）

昭和35年7月（出典資料の発行日）

「産業工芸試験所30年史」

編集・発行 工業技術院 産業工芸試験所

緒言

(工芸指導所の長所)

一望せる組織。建物の明快な割当て、整える設備、各種の技術に応ずる近代的な多数の機械、豊富な材料並びに原型の蒐集、科学的その他の目的に応ずる各種実験室、有力なものとしては、当指導所の金属あるいは漆に行う印刷転写の特許がある。

(工芸指導所の欠点)

a) 本所の欠点は、すべてこの種の研究所に一般に（ドイツにおいても、又その他の国においても）言えることであるが、その図案設計室は現実の仕事に即せず、たゞ抽象的に原型並びに意匠図案を作っている点である。すべて良くない工場は、このいわば指先で様々の形式を工夫したり、たゞ工芸学校で習ったもの、あるいは指導書で見付けたものの模倣をしたりすることができるにすぎない設計部を持っているのが普通である。このような状態であるから、たとえばドイツでは "工芸" という言葉は、芸術家や建築家の間では嘲笑の言葉となっており、こうした状態が 1906 年にドイツ工作連盟が設立される誘因となった。ドイツ工作連盟の目的は、多くの意匠家が装飾その他にとらわれて鈍化しつゝあったあの部分に芸術家の腕をふたたび持ち来し、且つ各工場の工長も自ら作るものに対して根本的に責任がもてるようにしようとするにあった。作られるものはすべて、便利で、気持よく、さらに大量生産の場においても、機能においても、とくにまた材料の使い方においても正当であり、美しい形式をもつものでなければならない。工芸指導所の作品はスケッチといった性質をもっているにすぎず、完成品の観がない。使用してみるとしばしば根本的な欠点が見られる。しかも美的な形に対する強い要求から作られたものでさえも、日本の古い時代の良い工房で作られた、質の高いもの (Qualitat) と並べてみると全然問題にならないとも言えるのである。

b) 次に、各工場もまた、その仕事之余りに抽象的すぎる。その技術も、私が 2、3 の日本の工房で見たごく進んだ質の良いものに比べて到底及ばないように思う。その原因はおそらく、工長と設計家が余りに分離しているためであると思う。両者は総合されなければならない。こゝではそれが実際の場で実現されていない。それ故、工場と設計者とが或る意味で一人の人間をなすように、両者が協議するようにならなければならない。本所の特許品には色々な未来の可能性が含まれている。しかし、今迄のやり方では何も始めることは出来ない。

提案

指導所の仕事は、3つに分割されるべきであろう。

- i 工業的生産のための規範原型の製作をおこなうこと
- ii 本所の特許を基礎として、本所独自の領域をもつこと
- iii 蒐集、宣伝ならびに日本固有のきわめて進んだもの、質のよいものを作る (Qualitat Arbeit) ための委員会を組織すること

I. 工業的生産のための規範原型の近代的製作をおこなうこと

国立唯一の研究所としての工芸指導所は、あらゆる近代的な調度品に対して、規範的原型を提供しなければならない。近代的な家具は一部にとり入れられ、ようやく真に認識され始めたのであるから、まず第一に問題となるべき点は、その根本形式を創造することである。したがって最近の外国雑誌の各号に載っている如き流行遊戯に対しては、本所は全然興味や関心をもつ必要はない。もし根本的形式が使用目的ならびにその機能から作り出されるならば、洒落者の流行の如き珍奇歪曲、様々の行きすぎ、誇張は消し去られてしまう。自然な単純さをもつ、きわめて上品な形式がそれにとって代るのである。この形式はもし伝統的に純化されてきた日本文化と、現代の諸制約とを結合する一つの近 - 古の結合点が見出されさえしたならば、その窮極の結果として、日本に於て特に良いものとなって現われるであろうと私は確信している。近代的製品は、古代の伝統的日本文化のように、ある課題の解決のための最も単純な方法を見出し、この単純さからその典雅な形式を発展させることによってのみ、近 - 古の結合を形成することができる。そうすることによって 国際的生産競争においても、日本の典型的なものを示すことができるであろう。さらに日本の国民的個性も特殊な日本固有の材料、たとえば漆や竹や紙、その他のものを通じて一層強調されるであろう世界市場では、感覚において、材料において、技術において、単に他と覇を競い得るのみならず、日本的で、他の国では到底作れないものでなくてはならない。これらはすべて、住居、仕事、食事、休息 (睡眠) の各機能に関連する問題として考えられなくてはならない。休息のための基礎的なタイプとしては、次のようなものがある。

1) 椅子、安楽椅子、腰掛

a) 木製、クッション付のもの、クッション無しのもの

b) 竹製、古い大名椅子を研究して弾力ある椅子を研究すれば、日本独特なものが作り出されるであろう。その他各種の編方或いは繊維 (糸、縄) を巻き付けた竹製品

2) 机、同じく木製及び竹製

- a) 引出し板付食卓、甲板の廻転及び拡大可能な丸卓子
- b) 書物机、作業机、裁縫机等
- c) 茶卓子、喫煙卓子
- d) 寝台用卓子
- e) 台所用机
- 3) 戸棚
 - a) 書籍 その他用
 - b) 衣裳戸棚、下着戸棚、靴戸棚
 - c) 台所用戸棚、脇戸棚
- 4) 化粧台、椅子付
- 5) 衣裳箆筒
- 6) 寝台
- 7) ソファー、肘掛付長椅子（寝椅子）、寝台兼用長椅子
- 8) 電気照明器（金属、木材、硝子、紙、絹使用）
 - a) 天井照明器
 - b) 壁照明器
 - c) スタンド、床あるいは机上照明用
- 9) インク壺、吸取紙挟。灰皿等一般に小さいもの
- 10) 屏風、衝立
- 11) 料理並びに洗濯用机、遊戯台
- 12) 各種家庭用品（工業生産上改良の必要、余地のあるもののすべて）

こゝにあげた各種の品物は、すべてが集まって一つの芸術的個性的な統一、調和をなすということよりもむしろ、各個の品物がそのものだけで完成され、仕上げられたものでなければならない。きわめて進んだもの、質のよいもの (Qualitat) は、常に相互に調和するものである。全体の調和のためには同質の木等を応用する程度で充分である。

(仕事の行い方)

まず、各種のものについて、今日国内の各工場で作られているすべての最上級品を提出する。これと比較するために外国の最上級の典型を蒐集する。次にアトリエにおいて単純な型のデッサンを行って原型を作り、その厳密な批判を行う。この批判によって原型を変更し、さらに改良された新型についてふたたび批判を行う。(ドイツにおいても、イギリスその他の国においても極めて質の良いものは、このような過程を約 20 回乃至それ以上繰返す。) このような批判を経た後に作られた最後の型が、芸術的に深い見識をもった人々の間で承認を得ることができた

ならば、そこで初めて完全な品物が作り出されることになる。その際に設計者と工長とは極めて密接な連絡をもたなくてはならない。材料処理や技術は最後まで問題にならない。こうして、そのものが完成されると、委員会に提出され、そこで何らの異議が出されなければ、その時はじめて、この品は規範原型として発表され、展示される。

こうして、良い規範原型が既に沢山作られて、一組をなすようになったならば、如何にして、又如何に良く利用されるかを宣伝するために、フィルムに作りあげる。そうすることによって、規範原型の形の美くしさと共に、その快適性、軽快さ（扱いの容易さ）、安定性、比例の正しさも、特に明瞭に表わされるであろう。その時このような近代的日本風な作品と共に、古代日本の最高級の良質のものを並べるのもきわめて興味があろう。そうしたならば、教養ある人々も、モダンなものによって伝統的な文化が失われてしまうことをおそれる心配もなくなるであろう。

II. 工芸指導所が自己の特許を基礎として独自の領域をもつこと

漆下地上の印刷転写法、各種材料の上におこなう圧刻印写法、あるいは金属板上の型紙写真転写法などは、それが美的に解決されるならば、将来色々な発展性がある。けれども 10 を超えるこれらのものが御土産品の感じをとり去ったとしても問題はデリケートで、必ずしも美的に良くなるとはいえず、たとえ 2、3 の美的には意味のないものが作り出されたとしても、それは工芸指導所の専門外の独自なものとして、大量生産されるにいたることもあろう。こうした場合においても同じく、芸術に対する深い見識のある人々によって作られた委員会によって、種々な判断がなされるべきことは勿論いう迄もない。

(仕事の行い方)

- 1) 指導所の指導によって、すでに作られている品物に対して、一般に如何なる美化の可能性があるか、又如何なる傾向の意匠スケッチをしたら良いか、という根本問題を明らかにするために、一般の批判を受け、討論を交すべきである。
- 2) その上で原画の意匠スケッチを行い、このスケッチに関して一般の忠告、批判を聞く。とくに、これに利用される写真について、この方法がとられなければならない。その上で写真の研究的撮影を行う。
- 3) 実際に原型の試作研究に入り、この原型の試験、改善を行い、その結果によって更に新しい試作原型を作る。この過程は、この試作原型に対する異議や問題がなくなる迄繰り返される。ちょうど I. の場合と同様な実験連鎖がとられること

になる。

4) 最後に最も妥当なものを作り出す。その批判は絶対的で、厳密、尖鋭な批判を経ないうちは何物も発表されてはならない。

III. 蒐集、宣伝ならびに日本固有のきわめて進んだもの、質のよいものを作るための委員会を設置することについて

工芸指導所は、長い年月を経て進歩しきった製品 (Qualitat) を作っている工房とは太刀打ちすることはできない。こうした工房にはしばしば 100 年もさかのぼる長い伝統があり、そこの製作者は品物を自ら設計し、かつ完成する芸術家である。これらの優秀な工房は何れも、他が到底及ぶことのできない質のものを実際に作っている。彼等は茶をたしなむ趣味豊かな好事家仲間や資産家の保護を受けて生活を維持しているので、自然に輸出の問題から除外されている。これらの名工たちは、私が彼等の素晴らしい作品を世界に紹介することを話した折、すべてが賛同の意を示したが、これら各工人の工芸は、絵画や建築より以上に、日本の精神的指導者となるであろう。

つまり、他の諸外国に決して見られないようなものとして現われるであろう。これらの工場の製品の中には輸出に向くようなものも沢山あるが、こうした作品を海外に輸出するという目的を助長するためには、工芸指導所のような国家施設は最も良い位置にあるというべきである。

工芸指導所は出来るだけ多くの方面から日本のすべての優秀製品の工房のリストを作り、同時にそれらの工房から輸出に適した最高級の優秀品を蒐集しなければならない。この蒐集はまず、東京、京都、大阪で展示され、さらにこの展覧会はアメリカ、ヨーロッパなど世界を巡るようにする。工芸指導所はコミッションと共に、諸雑費、諸支出の担保として 1 割の売上歩合をとる。工芸指導所は、I. 或いは II. の方法で自ら 2、3 の独自の優秀製品を作ったならば、その作品を同様にこの種の展覧会に陳列し、同時にこれを日本の調度品生産のための参考とせしめることができる。その操作にあたっては、厳密な基準がなければならないことはいふ迄もないけれども、これはとくに芸術的工房からの優秀製品選出にあたって注意すべき点である。そこでは日本固有の優秀品という観念が顧慮されなくてはならないと共に、その製品は国際的な価値の基準にも合致しなければならない。換言すれば、その選出に際しては「ヨーロッパ的に深い教養ある眼をもって日本を」見なければならない。工芸指導所はこの結果、日本の優秀製品製作の中心的地位を占めることとなり、ドイツ工作連盟の課題をひきうけることとなるであろう。これは工房の組合を形成することになるけれども、日本独自の諸状況からドイツ

のそれとは本質的に異った特殊なものとして出発することになるであろう。(商人たちはこれに対して全く賛成はしないかもしれない。何故なら、質のよい優秀なものという見地からするこのような選出は、全く商売人としての観点からすれば、必ずしも好都合ではないからである。)

以上のことの利点としては、次の2つがある。

- 1) 工房そのものの側からは、これによって広い販路を見出し、その名声が世界に拡められ、各工房間の関連が次第に拡大され、それによって益々生産に拍車がかけられる。この結果、新しい形式あるいは新しい解決に対する刺戟を、より近代的な生活から求め得ることにもなることである。
- 2) 工芸指導所自体は国立の研究所として、重大な国家的問題を実行する権限をもつことになる。さらに工芸指導所の全所員が常に日本の最も優秀な製品を眼前にもつという事も、大きな価値のあることといえることができる。おそらくそれは、所員に優秀な質の良いものに対する感覚を発展させ、又当指導所内部では少くともまやかしものに対するいかなる些細な萌芽も、もはや全く許さないだけの自己批判力を養うことにもなるであろう。

I. II. III. の諸問題の実施に対して、私は次のことが必要であると思う。

- 1) 芸術に対する深い見識ある人々を顧問として、委員会を設置すること。
- 2) 良き設計家と良き製作主任とが、密接な協働作業をおこなうこと。この場合は設計者と工長との質が最大の役割を果すのであるが、今のところ、私は個々の点にたち入ることはできない。
- 3) 個々の課題に対して芸術家の力を借りること。
- 4) 関係書籍や範となる製品などの索引を作ること。説明書、商会カタログの編纂(特に I. に関するもの)
- 5) 国内すべての優秀工房あるいは工場のリストを作ること。
- 6) 海外の優秀な工場、製作所等各商会発行カタログの蒐集を行うこと。これは日本の大使館等の助力をもってすれば可能である。
- 7) 国内の優秀良質な製品の分類整理は、少くとも指導所にとっては可能であろう。これはまず第一に行うべきことである。

最も大切なことは、おそらくヨーロッパならびにアメリカの諸製品はできるだけ鋭い批判をもってとりこまなくてはならないということである。日本の最高級の優秀製品は、世界の価値基準に耐えるものであり、国内だけに限定される必要はない。否、むしろ諸外国に優秀なものの一つの基準を与えることになろう。この基準によって、日本人は外国のすべてのものの鋭く厳密な分析を行い、明らかにされた優れた点を取り入れることができるようになるであろう。

世界の多くの教養ある人たちは、今までの日本からの輸入品を通して見た限り

では、日本の優秀な製品にたいしてさえ、何ら好意的な考えをもち得なかった。私の提案はこうした考えを一掃し、改めさせる助けになるであろうと信ずる。工芸指導所は、このような問題に対して、専門的施設として最も適当な位置にあるとすることができる。

1933年11月14日

仙台にて

ブルーノ・タウト